

平成二八年度 説話文学学会大会

講演会と研究発表 要旨

於慶應義塾大学三田キャンパス
二〇一六年六月二十五日(土)・二十六日(日)

【六月二十五日(土)】

シンポジウム「聖徳太子と説話」

司会 石川 透氏(慶應義塾大学)

聖徳太子伝に関する研究は、現在さまざまなかたちでなされている。慶應義塾大学には、付属研究所斯道文庫における聖徳太子伝研究の伝統があり、阿部隆一氏による諸伝本解題を始めとして、松本隆信氏を中心とした諸伝本翻刻、並びに、『中世聖徳太子伝集成』(影印版、勉強出版、全五巻)の出版が行われている。周知のように、聖徳太子伝の研究は、膨大な資料に対する研究の困難さを伴うが、説話文学研究にとっては、さまざまな視点を提供し、多くの分野の研究者が参加できる数少ないテーマの一つである。従来行われていた、諸伝本のテキスト間の考察や説話同士の比較研究に加え、絵解きとして行われていた聖徳太子絵伝の研究も進んでいる。もちろん、聖徳太子に関しては、未来記の問題や『太子開城記』等の新たな作品の出現の問題等もある。本シンポジウムによって、これらの多くの課題についての問題提起と、新たな研究の視点が提供できれば幸いである。

【基調講演】

中世聖徳太子伝記の一隅―成阿弥陀仏など―

牧野和夫氏(実践女子大学)

東山白毫院の生成(この場合、成立というのはむしろ適当ではない)については、室町時代(享徳三年(一四五四)以前)を確実に遡る有益な情報が中世聖徳太子伝記に埋もれていることを指摘して久しいが、その詳細を記す機会を逸していた。伝記中の年号や記事内容などを以て、その凡そは鎌倉時代末期頃には成立か、と推定も可能な四天王寺蔵(同系統の叡山文庫蔵を以て正すこと多し)太子伝に次の記述がある。

「而執行之成阿弥陀仏寺内之在家ヲ出テ四壁ヲ築キ十方ヲ勸進シテ再興ス京之東山大谷ト云所ヲ勸進所トシテ暫ク居シケリト云々又豊浦ノ慈性房教乗房金堂之後壁之絵ヲ曼陀羅ニ写シ同太子ノ十六歳ノ御影ヲ入洛シ奉テ大功ヲ成就シタリキ彼ノ勸進所ヲ寺ニ成テ太子堂申候也院号ヲ速成就院ト云々」

荒廃を極めた橘寺の再建修造のために「寺内之在家」を出て京の東山大谷に設けられた橘寺の勸進所であり、後に発展して院号を速成就院と称した太子堂になる、と云い、その橘寺復興の勸進を行ったのが成阿弥陀仏である、という。この成阿弥陀仏が法隆寺などの勸進に手腕を発揮した成阿弥陀仏である可能性の高いことは、九条家本『橘寺本願推古天皇御託宣』を踏まえた記述「偏ニ太子ノ芳徳也トソ仰ケル太子奏曰此所ハ〇(尺迦)如来転法輪ノ砌也故ニ此瑞相有云々本願御託宣記ニ見タリ」(叡山文庫蔵本による)などの認められる点に窺えるが、なによりも重要な点は、その凡そは鎌倉時代末期頃には成立か、と推定も可能な太子伝の記述中に存すること

である。

成阿弥陀仏は、嘉祿二年（一二二六）東大寺僧秀恵が書写した東大寺八幡経卷第一の書写識語に「比丘尼成阿弥陀仏此経勸進之根源」と始めて姿を現す。東大寺八幡経は、その勸進による書写の営為が継続され安貞二年（一二二八）迄に完了か、と考えられている。しかし、勸進書写の完了後直ちに東大寺八幡経を納める御経蔵造営の為の勸進が始まり、仁治二年（一二四一）迄継続されたので、正確には東大寺八幡経をめぐる勸進活動の一時期は、成阿弥陀仏勸進の法隆寺や橘寺関連の修復造営の勸進活動と時期的に重なってくる。

嘉禎三年（一二三七）正月に近衛兼経が九条道家の娘仁子を妻に迎え、三月、道家が兼経に摂政を譲る。摂政をめぐる鋭く対立してきた近衛・九条両家の円満な一時期が嘉禎三年前後に展開するが、この一時期に成阿弥陀仏勸進・慶政願主という組み合わせで集中して行われたのが他でもない聖徳太子ゆかりの南都寺院の法隆寺や橘寺の修造であった。九条道家の四天王寺参詣もまたこの一時期のことであった。

以上のような経緯を踏まえて若干の考察・推測を加える。その過程で釈迦五百大願や『閑居友』などにも触れたい。

【報告】

律院と聖徳太子伝―称名寺と橘寺を中心に

高橋悠介氏（慶應義塾大学斯道文庫）

聖徳太子をめぐる信仰や口伝・注釈の展開に、中世律宗が深く関わっていたことについては、林幹彌氏、阿部泰郎氏、牧野和夫氏、追塩千尋氏など、先学による優れた研究が備わる。とりわけ、太子関連の秘事の相承自体をよく物語る、横浜市・称名寺の『上宮菩薩秘伝』（叡尊の甥、惣持がまとめた秘伝）などは、『太子信仰の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）に代表される林氏の成果をふまえ、牧野氏がさらに研究を深めた重要資料と言えよう。称名寺には、『上宮菩薩秘伝』以外にも太子関連の聖教が複数伝わっており、鎌倉時代の律院における太子関連の説をうかがわせる貴重な資料群となっている。

また、橘寺も、嘉禎年間の推古天皇託宣と勸進修造を経た後、覚盛の弟子・戒学を開山に迎えて律院化した太子関連寺院で、太子伝生成の拠点としても注目される。二世長老法空による太子伝はよく知られているが、『中世聖徳太子伝集成』（勉誠出版、二〇〇五年）により影印が公開された四天王寺蔵太子伝（山田忠雄氏旧蔵本）も、時代は室町まで下るものの、橘寺旧蔵本を買得したという識語を持つ太子伝である。その記事中には、橘寺修造の歴史や律院のネットワークが刻印されており、橘寺所談の太子伝と思われる。

本発表では、こうした太子関連資料や太子伝の検討を中心に、中世の律院における太子信仰・太子伝注釈とその特徴について、いま少し考えてみたい。

聖徳太子伝の日羅をめぐる諸説と愛宕山の縁起

松本真輔氏（長崎外国語大学）

日羅は聖徳太子伝に登場する重要人物の一人で、『日本書紀』に既に登場し、『聖徳太子伝暦』

や中世以後に編纂された太子伝にも繰り返し現れる。中世までの日羅像の変遷については『聖法輪藏』などを中心とした渡辺信和氏の研究があり、様々な改変を経つつ聖徳太子が前生南岳慧思であったという伝説を強化する役割を負わされるようになっていたことが知られている。一方、日羅の伝承は聖徳太子以外にも波及していた。さらに『槻峯寺建立修行縁起絵巻』や『あたごの本値』では、百濟調伏というモチーフとともに日羅が登場していることが五来重氏や高岸輝氏の研究によつて知られている。また、天狗との関連からは『是害房絵巻』に登場する「日羅」も注目されるであろう。こうした日羅に関する諸言説の展開については既に簡単に触れたこともあるのだが、『アジア遊学』二〇一二年七月）、十分に議論が尽くせなかつた部分もあり、本発表では、愛宕山の信仰と関連させながら日羅像の変遷を追いかけ、あわせて中世から近世にかけての太子伝の問題について考えてみたい。

瑞泉寺本聖徳太子絵伝―その“説話性”と“礼拝性”をめぐる

村松加奈子氏（龍谷ミュージアム）

本報告では、聖徳太子絵伝の「絵解き説法」で有名な、富山県南砺市の古刹・井波別院瑞泉寺（真宗大谷派）に伝来する中世太子絵伝をめぐる、絵伝に共存する“説話性”、“礼拝性”に注目し、あらためて中世太子絵伝の受容のあり方を考えてみたい。

瑞泉寺本の発願者や成立年代は詳らかではないが、寺伝によれば瑞泉寺創建の明德元年（一三九〇）、後小松天皇から太子二歳像とともに下賜されたという。絵画様式は南北朝時代の十四世紀末と推測され、中世太子伝が盛んに生成・書写された時代の絵伝とわかる。

瑞泉寺本の特徴のひとつは、他本に比して採話数が多く、実に九十場面を超える事績が描き込まれている点である。内容は『聖徳太子伝暦』をベースとしつつ、三歳条「鶯寺の建立」、三十五歳条「蛙の梵唄師」といった、他本に類例のない説話図像も散見される。これらは真宗高田派と所縁の深い『正法輪藏』シリーズや、慶應義塾図書館蔵『上宮救世大聖御伝』（室町書写）などの文献テキストに収録される逸話である。

そして、過剰な説話性よりも特異なのは、各幅の上部に付された、銘文を伴った色紙型の存在である。通常、太子絵伝の銘文として記されるのは、太子の年齢・事績の説明、あるいは『伝暦』からの抄出であり、概して説話図像の解説補助以上の役割をもたない。ところが瑞泉寺本に記されるのは、いわゆる「廟窟偈」・「銅蓋銘」、「善光寺如来と太子の往復書簡譚」で説かれる“秘事口伝”の四句偈で、真宗においては「光明本尊」や「和朝先徳連坐像」、「孝養太子像」といった太子礼拝画像に記される文言である。すなわち、瑞泉寺本は太子絵伝（説話画）であるにも関わらず、礼拝画に付されるべき銘文を伴っているのである。

本報告では、瑞泉寺本に付与された“礼拝性”について、①太子講式の儀礼テキスト『聖徳太子講式』との関連や、②同じく画中に「廟窟偈」を伴う石川・正雲寺伝来の中世太子絵伝二種との比較から論じる。とりわけ②においては、初期真宗における説話画と礼拝画の交響や、いわゆる「太子略絵伝」への展開についても言及したい。

【六月二十六日（日）】

研究発表（午前の部）

『今昔物語集』巻二十七「近江国生霊来京殺人語第二十」の話型に関する考察

藤崎祐二氏（九州大学大学院博士後期課程）

『今昔物語集』巻二十七「近江国生霊来京殺人語第二十」は「枯骨報恩」の話型である。関敬吾・今野達両氏の研究によれば、「枯骨報恩」の話型は、

〔Ⅰ〕野晒しの骸骨を見つけて供養したところ、霊に感謝され、生家に案内されて供応を受ける。

遺族との接触により事の次第が明らかとなり、遺族は遺骨を回収して埋葬することを得る。

また、恩人に報いる。

〔Ⅱ〕野晒しの骸骨が歌っているのを訳を尋ねると、夫を他の女に取られた恨みを晴らしたいので

復讐に手を貸してほしいと頼まれ、希望を叶えてやり報恩を受ける。

〔Ⅲ〕野晒しの骸骨を供養した人の家に女が現れ、数年の間住み込んで働くも、最後には自身が供養された骸骨であり、報恩のために働いたことを明かして去る。

の三つに分類され、これらの内『今昔物語集』巻二十七第二十は〔Ⅱ〕型に属している。右の三類の内〔Ⅰ〕型については、今野氏による考察（「枯骨報恩」の伝承と文芸（上）『国文学言語と文芸』四七、一九六六年）をはじめとして、該当話およびその源流に関する研究に進展が見られるものの、〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕型の研究は進んでいない。〔Ⅱ〕型の該当話に関しては、近世怪異譚に散見されること、本発表でとりあげる『今昔物語集』巻二十七第二十が日本における最古の文献記載例であることが、今野氏（日本古典文学全集『今昔物語集』の各話解説）によって指摘されたにとどまっている。

しかしながら、漢籍資料に目を転じれば、〔Ⅱ〕の該当話としてさらに時代を遡るものが見出される。すなわち、散逸六朝志怪小説『志怪』の「張禹」（李昉等撰『太平広記』卷三一八・鬼部三、太平興国二年（九七七）刊に採録）がそれである。このことは、〔Ⅱ〕の話型が大陸からもたらされたことを示唆しているのではないかと考える。本発表では、「張禹」と『今昔物語集』巻二十七第二十とを比較した上で、六朝志怪小説類に見られる関連説話をも見渡しながら、〔Ⅱ〕型の源流について考察を進めたい。

鼻に付随する観念―大鼻・赤鼻と異形―

旅田 孟氏（大阪府立大学大学院博士後期課程）

本発表は、「大鼻・赤鼻」など特徴的な鼻が中世日本社会の中でどのように認識されていたかについて探るものである。

『信貴山縁起』『石山寺縁起』『一遍上人絵伝』といった絵画資料には、しばしば「大鼻・赤鼻」の人物が描かれる。そのほとんどが民間の宗教者や芸能者、童子・乞食・癩者などである。

高橋亨氏（一九九五）は、個性的な顔に描かれる意味について「大きな目や大きな口、縮れた髪

などが、周縁性の強い卑俗さの指標となる」と述べている。たしかに、天皇・貴族を中心とする社会システムにおける周縁的存在が「大鼻・赤鼻」で描かれている。

ただ、他の身体描写とは異なり、「大鼻・赤鼻」には「卑俗さの指標」以外の意味もあつたのではないかと考えられる。結論を言えば、「大鼻・赤鼻」は、蓬髪・裏頭などと同類の、ともすれば差別の対象となりうる一方で「恐れ・畏敬の目をもつて見られる場合すら見出しうる」（網野善彦氏・一九八四）ような「異形」のひとつだったらしいのである。藤原孝道の一族は代々鼻が大きかったため「鼻が党」と嘲笑され（古今著聞集）、殺人罪を勝手に被つた男の容姿について「鼻下リテ赤髪也。目八摺赤メタルニヤ有ラン、血目二見成テ」と怪異のように描写されるのは（今昔物語集）、「大鼻・赤鼻」の両義性を示しているよう。

周縁的存在は、王侯貴族の眼からすれば全く異なる世界を生きる得体の知れない「異形」に他ならない。先に挙げた「大鼻・赤鼻」で描かれる者たちは、時代によつて相違はあるものの、いずれもが侮蔑と畏怖の混交した眼差しでもつて見られる存在であつた。「大鼻・赤鼻」は「異形」への両義的眼差しを表現するために描かれるものであり、「卑俗さの指標」として目口を誇張して描くとはまた別だつたのではなからうか。

『雑談集』で公任の作法を批判する下部の綽名が「鼻先生」であること、『源平盛衰記』で清盛が「鼻平太」と称されていることなどを併せ、「大鼻・赤鼻」ひいては「鼻」全般を「異形」の視点から論じていく。

『古今著聞集』第二六五話前半部について

——『刀自女経』と台密におけるダキニ天法をめぐって——

猪瀬千尋氏（名古屋大学CHIT研究員）

『古今著聞集』第二六五話前半部は、藤原忠実が自らの願望をとげるため、「大権房」なる僧にダキニ天法を修させたところ、忠実の夢に容顔美麗なる女房が現われ、その後、願いが成就したとするものである。ダキニ天法をめぐる研究は、これまで東密のものが主体であり、『大日経疏』に見える、魂を喰らうという「荼吉尼」のイメージや、即位灌頂の本尊として、あるいは陰陽道の観点等から論じられてきた。しかし早くは喜田貞吉の『福神』（一九三五年）に指摘がある通り、『古今著聞集』当該話のダキニ天は「福天神」と称されており、東密のダキニ天とは性質が異なるものである。

如上の点を踏まえ、ここでは台密におけるダキニ天法に注目する。台密におけるダキニ天法については、まとまったテクストとして『溪嵐拾葉集』『吒枳尼天秘決』があるものの、そこで引用される諸書はそのほとんどが不詳とされてきた。発表ではこれら『溪嵐拾葉集』に引用される諸書が、天台系の寺院に現存することを示した上で、そのうちの『須臾成就福德刀自女経（刀自女経）』なる経典について論じる。『刀自女経』については、従来その存在が明らかではなかったが、台密において相当の流布が認められる経典である。そこに説かれるダキニ天は大白狐に乗つた天女の姿であらわされ、その印明を唱える者は福德利生して止まないという。かかる本尊のイメージが『古今著聞集』のものと重なることから、当該話におけるダキニ天法は天台の修法である可能性

が高いと結論づけられる。

発表ではさらに、当該話がダキ二天について、花園の大臣の御跡でも祀られていたと記す点に注目する。花園大臣邸跡は忠実の孫・師長の邸宅があり、忠実が住んだという記録が見られない事から、話の主体が忠実から師長にすり替わっている点が指摘できる。忠実、師長はダキ二天信仰のほか、妙音天信仰も有しており（『台記』久安三年十月十四日条など）、これら雑多な尊格の信仰は、忠実―師長へと継承されたと考えられる。

研究発表（午後部）

『大橋の中将』の成立と流布

桑 汐里氏（総合研究大学大学院博士後期課程）

『大橋の中将』は、梶原景時の讒言によって鎌倉で幽閉された父・大橋の中将の行方を尋ねるため、子のまに王が鎌倉へと下向する物語である。テキストはお伽草子、古浄瑠璃双方のかたちで伝わるほか、日蓮が南条時允に宛てた健治二年（一二七六）閏三月二十四日の消息『南条殿御返事』と、長享二年（一四八八）頃成立の『浪合記』に、類話が確認されている。

作品研究としては、諸資料を比較検討した小川武彦氏の論（『御伽草子から仮名草子へ』鑑賞日本古典文学『御伽草子・仮名草子』角川書店、一九七六年）、法華経と頼朝に焦点を当てた中島美弥子氏の論（『大橋の中将』と法華経信仰―頼朝像への視覚―『立教大学日本文学』第九十号、二〇〇三年）、斬首救済説話という視点から読み解いた佐谷眞木人氏の論（『古浄瑠璃・説経とお伽草子―斬首救済説話をめぐって』『お伽草子 百花繚乱』笠間書院、二〇〇八年）が知られている。しかし、諸本の違いや、『浪合記』所収の家伝との関係については十分な検討がなされていない。

本発表では、『大橋の中将』の諸本に関する基礎的な分析を通して法華経との関係に注目し、日蓮宗における本作の縁起化、またそれらと家伝との関連について報告する。

はじめに諸本の整理、分析を行う。代表的な伝本は大谷女子大学附属図書館蔵本、小野幸氏蔵本、東京大学国文学研究室蔵本が知られているが、言及の少ない国文学研究資料館本をも考察の対象に加え、A系・B系の二系統に分かれる本文のそれぞれの特徴について分析する。次にA系にみえる法華経関連本文に注目し、日蓮遺文の注釈書を通して、日蓮宗ゆかりの物語として『大橋の中将』が享受され、流布していたことを明らかにしたい。

絵画テキストによる説話改変

――月岡芳年『新形三十六怪撰』における絵の語りを中心に――

古明地樹氏（獨協中学校・高等学校非常勤講師）

本発表では、浮世絵師、月岡芳年による揃物『新形三十六怪撰』を通し、絵の語りによる説

話の改変方法を提示する。それによって、作品の文芸性を見出すと共に、絵の語りにおける方法、いわば絵画テクストの在り方を探る事を目的とする。

明治初期に成立した『新形三十六怪撰』は、中世の説話から近世の芸能に至るまでの、三十六の怪異譚に取材した揃物である。詞書を伴わない画面は、それまでの伝統を踏まえた構図を援用し、観者の記憶を喚起することで、その主題を伝達する。しかし、画面に展開されるのは、芳年の手によって改変された主題である。それは、古典世界を明治初期の（個人）を意識する眼で見つめ直した、新たな物語世界に他ならない。ここに、これまであまり注目されてこなかった、一枚絵によってなされる説話改変の様態を見出した。

説話に限らず、現在、絵が物語る機能を備えているということは、当然の認識となりつつある。それは、これまでの研究が多く蓄積でもって証明してきた結果に他ならない。その中で多く論じられてきたのは絵巻や掛幅であり、絵画テクストの語りも、そこで同時に明らかにされてきた。しかし、絵の本質を考えるのであれば、絵巻などの語りは特異なものであると意識しなければならぬ。基本的に、ある時間における瞬間を描き出す事しかできない絵画表現は、時間の奥行きを持つストーリーを表現するために、様々な工夫を必要としている。詞書などの言語テクストの付与、あるいは同時異図法などの表現は、絵の中に時間を生んだ。

これらの特異な語りへ目が向けられるのは当然であったのかもしれないが、一方で、瞬間描写によつて語りを行う絵画テクストは見過ごされがちであった。この問題に当たり、本発表では、一枚の絵が観者の記憶と交響することで行う浮世絵の語りに目を向ける。絵の語りを認め、読みの対象としての絵の領域をより拡大することを目指したい。

京都市立芸術大学所蔵「平家物語絵巻」粉本について

——伝土佐光信筆「平家物語絵巻」の模本として考える——

山本陽子氏（明星大学教授）

室町時代後期から江戸時代前期にかけて、挿絵入りの『平家物語』が絵巻・絵本・版本といった多様な形態で制作されている。それらの中で現存最古の作品として知られるのが、室町後期の伝土佐光信筆「平家物語絵巻」である。小型で色彩のない白描作品ながら、例えば清盛の死の場面では、二位殿の夢に火車が現れるところや、清盛の体から黒煙が上がるころなど、他の挿絵にない場面や描写が含まれていることが注目される。ただし現存するのは巻一・巻三・巻六のごく一部に過ぎず、その全体像を想像することは難しく、物語全巻を通じた形で完成したか否かさえ確かでない。

本発表では、京都市立芸術大学所蔵「平家物語絵巻」粉本により、この伝光信本にさらなる情報を加えて考察したい。当粉本は別の平家物語絵巻を制作する際の下絵と推測されたが、大まかな下描きの跡がなくいきなり明確な輪郭線で描かれていること、絵と絵の間の空間が省略されていることから、下絵ではなく完成作品を透き写し（トレース）した模写であると判明する。さらに伝土佐光信筆「平家物語絵巻」と比較すると、伝光信本に特徴的な頭が大きく寸詰まりで丸みを帯びた武者の体型が共通すること、一図ずつの縦幅が十六cm程度と近似し、色指定がな

く白描と覚しいことなどから、伝光信本の欠失部分のうち最終巻の巻十二後半と「灌頂の巻」を模写したものと考えられる。

土佐派は大和絵の主流であったので、伝光信本が後世の平家物語絵の規範となった可能性がある。そこで、この模写作品の各場面を後世の平家物語絵巻・絵本の巻十二と比較することから、挿絵としていかなる場面を選択する傾向があったか、その場面選択は後世に受け継がれたか、軍記物語絵としてどのような特徴を持つか、構図上の影響が後の絵巻・絵本に見出せるか、を検討したい。さらにこの模本の書き込みに頻出する「さうしをよくよく見へし」という文の意味についても考察したい。